

報 告

現代美術家との協働による知的障害者の造形活動

－「この惑星^{ほし}に生まれて－今村源+三嶽伊紗+アート・メッセンジャー」展

吉 原 美恵子*

Figurative/creative actions of mentally challenged people with contemporary artists

－ “Born on this planet-Hajime Imamura+Isa Mitake+Art Messengers”

Mieko YOSHIHARA

概 要

知的な障害を持つ人たちが、同時代の美術家と協働して作品を制作することを通して、美術の世界に分け入り、その制作の厳しさや愉しさを味わうことができた事例を紹介する。美術家の指導の下で参加者たちが担ったのは、豊かな表情を持つ圧倒的な量のディテールを制作することだった。展覧会までの日々を創作活動に費やした彼らが得たものは、美術家への敬意と信頼と、自分の存在や手仕事が必要とされる喜びだったかもしれない。そして、そのことを、展覧会を通じて素直に観者に伝えるメッセンジャーとしての役割を果たすことで、彼らは堂々とアートの世界に居場所を得ることができたのではないだろうか。

この惑星^{ほし}に生まれて、
頭上には、いつも果てしない空があり、
この惑星に生まれて、
同じ刻^{とき}を生きる、たくさんのいのちがあることを知った。

この惑星に生まれて、
自分の夢を持ち、それを育てる苦しさや喜びを味わい、
この惑星に生まれて、
人の手や心が創り出す表現の愉しさや美しさを知った。

私たちは一人でも多くの人たちに
自分たちが知り得たことを伝えたい。

* 徳島県立近代美術館

1. はじめに

2016年10月、徳島県文化の森総合公園内にある近代美術館ギャラリーで展覧会が開催された。展覧されたのは、天井から床まで、部屋いっぱいを使った一点のインスタレーション作品<この惑星に生まれて> (2016年 ミクストメディア)。展覧会場入り口に掲げられた、「この惑星に生まれてー今村源+三嶽伊紗+アート・メッセンジャー」展は、サブタイトルにも記されているように、活躍中の現代美術家である今村源、三嶽伊紗と知的障害者施設の利用者たちとの共同／協同／協働制作によって生まれた現代美術の展覧会である。スケールの大きな構想と知的な会場構成に加えて、ディテールのきらめきには制作に携わったすべての人の存在が息づいており、この空間を手応えのある確かなものにしていった。



図1 <この惑星に生まれて> (部分) 2016年 ミクストメディア 写真撮影：米津光
「この惑星に生まれてー今村源+三嶽伊紗+アート・メッセンジャー in シーズ」展にて
2016年10月1日(土)ー10月10日(月・祝) 於・近代美術館ギャラリー

2. これまで

この地球上に生まれてきたからには、喜びの瞬間や心躍る場面に遭遇したいと思うのは、障害のあるなしに関わらない。余暇の過ごし方は人それぞれだが、障害を持つ人たちにはそのような時間をどう過ごすかについての多様な選択肢は、残念ながら少ないと言わざるを得ない。

このたびの展覧会への参加者は、阿南市にある知的障害者のための施設の利用者たちが中心であった。彼らは月に1回の創作活動の時間を持ち、手を動かして創作するという時間に親しんでいた。愉しみに待つ者もおれば、促されて足を向ける者もいただろうけれど、少なくとも活動は強制されることなく、自らの意志で参加し、気が向かなくなれば部屋から出て行くことは当たり前のことだった。実はこの時間は、施設の理事長の設立当初からの願いであり、夢であった。美術館に学

芸員として働いていた筆者に、月に1回のボランティアで創作活動をしてもらえまいかという話が舞い込んできたとき、何ができるかということよりも、何かができるぞという思いが沸き上がり、引き受けることにした。

ゆるやかな活動で、入所、通所にかかわらず、気が向いた利用者が広い空間に集い、絵の具、鉛筆、色紙など、さまざまな材料を用いて、トレーニングのような手作業を楽しんだものだった。活動内容は毎回シンプルなものになるように心がけたが、そのほとんどが現代美術家たちの作品や制作にヒントを得たものであった。例えば、調査研究の対象であった北山善夫の粘り強い、こだわりの作業に心を打たれた後には、その制作過程の一部を追体験させるような作業を考え、アントニー・ゴームリーのユーモラスな作品はそのままに、自分の身体のかたちを機械的に太らせる作業となった。彼らにとっては、このたびの展覧会もその活動の延長線上にあり、発展したものだと考えてよいだろう。

しかし、これまでの創作活動と大きく違っていることは、今回は「展覧する作品を創る」という点だ。一人一人が生み出したかたちは、作品の一部となり、かけがえのない「ディテール（部分）」としての輝きを放つことになる。これまでのトレーニングが存分に活かされた活動でもあった。

3. 天と地と人

この新しい試みに賛同してくれたのは、キャリアと実力を備えたベテラン美術家たちで、京都市在住の今村源と天津市在住の三嶽伊紗だった。展覧会場には、今村源と三嶽伊紗が企図した世界が出現していた。天井や壁を這うように伸びる、自由に気ままなグレーの針金を辿ると、いくつもの生き物が逆さにぶら下がっている。枝を這うカタツムリ、花も虫も魚も、すべて等しく繋がっている。グレーの太い針金は、今村源の仕事を知る人には馴染みの「きのこの菌糸」である。この菌糸からきのこが生まれ出るわけだが、なるほど、会場の中央から少し逸れた辺りに今村の大きなきのこが、やはり逆さに連なっている。天井や壁を伝う菌床から、きのこのみならず、幾多の生命が生まれ出ているという光景である。

他方、床に目を遣ると、青い空が広がっている。これは、三嶽の作品にもしばしば使われる素材である感圧紙（ノーカーボン紙）から生まれた青である。層になって反応し合いながら発色する紙と、一枚で発色する特殊な感圧紙が併用されていたのだが、一枚で発色する感圧紙は、このたび三嶽が探し出してきた素材であった。折ったり擦ったりすると、染料の青色色素が現れてくる。三嶽はそのデリケートな素材の反応を面白がり、その青で空を生みだそうとしたのである。

足元に広がる空と、天井には地中に増殖する菌糸が可視化されているこの空間は、実は天地が入れ替わっていて、生き物はすべて天井のいのちの温床から生まれ出ている。その中に見いだせる幾体かの人の姿だけは、私たちと同じ向きでぶら下がっている。今村曰く、「人だけは逆立ちをしている」ということらしい。天地がすっかり入れ替わってしまった世界で、逆立ちをしている人々は何を想っているのだろうか。

4. 二つのワークショップ

この大きなインスタレーション作品のために、今村は7月に、三嶽は8月に、それぞれがワークショップを開催し、利用者たちはアートを生み出す現場に初めて臨んだのだった。

そして展覧会が開催される日まで、利用者たちは2種類の創作活動を日々のスケジュールの中に取り入れ、たくさんの「作品の部分」を準備し、展示空間を充足させることになる。ワークショップの時間を反芻しながら作業した日もあれば、大きな一つのインスタレーション作品にするにはディテールが全然足りないと言われ、ネジを巻いて創作活動に精を出した日もあったという。彼らの日常は、いつになく明るく活気に満ちていたと聞いている。

今村源のワークショップは、今村が準備したさまざまな色の針金を使って、この地球上の沢山の生き物を創り出すというものであった。今村は、細い針金を縫ったものを大量に準備し、創作の前に利用者たちに話しかけた。地球上には様々な生き物がいるけれど、それを自分たちで創ってみよう、と。今村は、発想を促すための様々な図鑑や大きなものを創るための支柱などを持ち込み、利用者たちのあらゆる反応に対応すべく周到な準備をしていた。

三嶽伊紗は、それぞれの頭上にある空を描き、それらを繋げて広い空をみんなで創ろうと呼びかけた。三嶽が用意したのは、空を見上げたときに目に入るものの写真。雲や虹、鳥や虫、飛行機や飛行機雲など。2種類の感圧紙を使ったが、いずれも関われば関わるほど、青い色はより青く、濃く、目の前に立ち現れた。

二人の美術家は、ワークショップで使った材料をたっぷりと残し、展覧会の開催までに広い会場に展覽できるだけの「作品の部分」を調べておくようにと言って、それぞれのアトリエに戻っていった。そして、会場構成について考え、自らの表現の仕事も進めた。今村は会場のすべてのいのちを繋げる菌糸と、そこから生まれるいのちを象徴する大きな「きのこ」を、三嶽は宇宙空間の中で我々の生きる惑星である地球をつよく意識させることになる「月」を持ち込んだのである。

5. インスタレーション

9月末、美術家たちが徳島入りし、会場の飾り付けが始まった。比較的障害の軽い人たちが作業にやってきた。感圧紙の作品を仕分けたり、針金の作品を吊ったり、それぞれが積極的にできる作業をした。作家への親しみと敬意、協働で一つのものを創り上げる喜びと誇らしさは、生き生きとして嬉しそうな彼らの表情から読み取れた。

作業の最後に、今村と利用者たちが集まって、余った針金で何かを創っていた。今村が提案したゴキブリだという。そして、地球と共に長い時間を生き延びてきたその種を、最後にいのちの連鎖に繋げた。馴染みがあるものの、決して身辺に出没することを歓迎しない、この生き物の創造に、彼らは嬉々として取り組んでいた。さまざまな針金の残りを巻き付けながら、カラフルで雑多なゴキブリができあがると、みんなでぐると空間を見渡し、今村と一緒に会場入り口正面の壁に堂々と取り付けた。今村のキノコに繋がる菌糸に連ねて、もちろん逆さまに。



図2 <この惑星に生まれて> (部分) 2016年 ミクストメディア 写真撮影：米津光

他方、三嶽は一連の展示作業の最後に、制作してきた鏡を今村の菌糸に繋げながら取り付け、スポットライトを反射させて、朧月を映し出した。展示空間はいよいよ宇宙に浮かぶ惑星へと変容した。三嶽と今村の完璧なまでのコンビネーションに感動しながら、彼らが重ねた丁寧で熱いミーティングの時間や、いつもながらの創作への厳しく真摯な姿勢に思いを馳せた。

6. 芸術への敬意と素直な作品理解

ここでは、障害者はその障害の程度に応じて作品づくりに参加し、アートを生み出す愉しさや難しさを素直に伝える役割を果たしていた。目指していたのは、「障害者アート」でも「エイブル・アート」でも「アール・ブリュット」でもない。彼らはアート・メッセンジャーとして、美術家と並走しながら作品の豊かなディテールづくりに取り組み、アートの愉しさを伝える役割を誇り高く担っていた。そのことは、会場に足を運んだ参加者たちの表情からたやすく読み取ることができた。作品を熟知している者の目で眺め、自分が関わったところや苦勞した点などについて自信に満ちた様子で家族などに説明する者もいた。

このスケールの作品に欠くことができない、圧倒的な細部表現の豊穡を担った彼らは、さながら指揮者のようにワークショップで彼らを導いた美術家に尊敬の念と親しみと愛情を感じていた。インスタレーション作業にやってきたメッセンジャーたちが、久しぶりに再会した彼らの「先生」を見つめた目や親しみのこもる表情に、今村源も三嶽伊紗も驚きを隠せなかった。それは、駆けより、近づいてきたときに彼らがとった距離にも顕著だった。懐かしさと嬉しさで、ほとんど迫るように今村や三嶽を取り囲んだからだ。彼らは「こんにちは」と挨拶し、その後は何を話してよいのか分

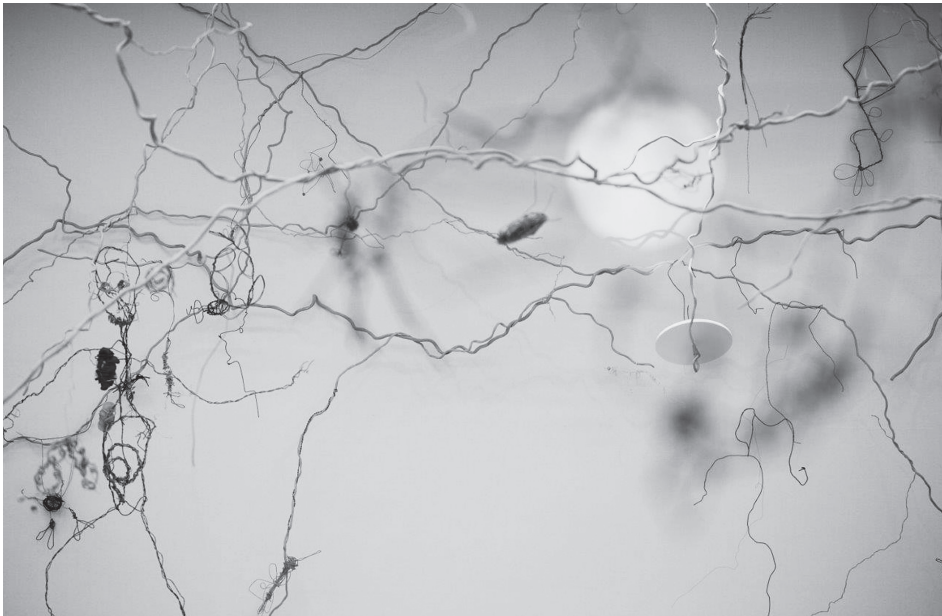


図3 <この惑星に生まれて> (部分) 2016年 ミクストメディア 写真撮影: 米津光

からぬようでありながらも、懐かしい二人の先生を見つめ、笑顔を絶やすことがなかった。そこには敬意と信頼と安心が見て取れた。そして、二人の美術家とメッセンジャーたちが生み出した天と地の間には、たとえ逆になっていようが、紛れもなく、私たち人間の存在する場が存在していた。天と地が「パラレル」な関係であるならば、それらは決して交わることがないのだが、そこに「クロッシング」する人たちの存在があれば、天地は融合し、いのちのための時空が現れる。出現作品はそれを明解に示す優れた同時代の美術作品であり、そのことは何よりも、展覧会場に出現した作品が雄弁に物語っていた。そして、そのことを最もよく理解していたのは、おそらくメッセンジャーたちではなかったかと思われてならない。天と地の間を自由にのびのびと往来しながら互いに響き合い、アートに身体をすべてで取り組む愉しみを味わったのだから。

7. おわりに

2020年に東京で開催されるオリンピック、パラリンピックは、スポーツだけでなく文化の祭典としての役割も強く意識されるであろうことは、昨今の社会状況から推測するに難くない。しかし、筆者が開所まもなくより十数年間、関わり続けてきた知的障害者支援施設の利用者たちには、スポーツの分野にも文化的分野にも、その活躍が大いに期待される場はほとんどないように感じられた。

他方で、知的障害者の手による創作物を「エイブル・アート」や「アール・ブリュット」などという括りで紹介し、障害を持つ人たちの芸術活動を活発化させようとする動きは大きくなってきており、ファイン・アートの世界への助力や支援とは違う熱を帯びていると感じられもした。科学的な根拠を基盤に、表現内容を知的に構成しようとする美的教育とは対極にある、自由で伸びやかで、

イノセントな雰囲気を漂わせる表現に、アカデミズムにはない魅力を感じる人も多い。しかし、実際に創作活動は高度な知的作業であるがゆえに、例えば、意図のない奔放な描線や気が遠くなりそうな部分の集積などという特徴を以て、「障害者アーティスト」として創作活動を展開してゆける人は稀である。とはいえ、障害のある彼らは創作活動が嫌いではない。ならば、「アーティスト」を目指さなくても、アートの愉しさを伝える「メッセンジャー」として美術家たちと協働し、アートの楽しみを素直に伝え、広めることが実は最も彼らに適したアートとの関わりではないかという考えが日増しに膨らんだ。

翻って巷では、秀でた美術家たちが同時代を生きているというのに、その制作発表の場に多くの人が訪れることはほとんどない。しかし、くだんの障害者施設の利用者は長い間、毎月1回の創作活動に参加して、現代美術家たちのしてきたことの一端に触れ、その一部をトレーニングとして経験してきてもいた。障害も現代の表現への興味関心も持たない人たちに較べて、障害を持つ今回の参加者たちの方がはるかに現代アートへのアプローチは易しいことかもしれない。深く仕組まれたコンセプトの理解はなくても、アートに敬意を抱きつつ純粋に嗜好し、愉しむ術について、繊細な彼らはとうに習熟してしまっているかもしれない。

参考文献

吉原美恵子（2014）「三嶽伊紗のしごと－みているもののむこう」 徳島県立近代美術館

吉原美恵子（2016）「この惑星に生まれて－今村源＋三嶽伊紗＋アート・メッセンジャー・in シーズ」 知的障害者支援施設シーズ

Abstract

Through the workshops and temporary exhibition with contemporary artists, the mentally challenged people could get confidence and the place of their own in the fine contemporary art. They are able to show their experiences of creative/figurative activities and fun of contemporary art not as artists, but as art messengers.